

平成24年度教育事業
免許状更新講習

ポリ袋を活用した野外炊飯やリスクマネジメントの手法、仲間づくりゲームの進め方、肱川での水生生物や岩石の採集など、学校現場ですぐに活用できる最新の知識や指導技術を学ぶことができました。

1. 事業実施までの経緯

平成19年6月の改正教育職員免許法の成立により、平成21年4月1日から教員免許更新制が導入された。教員免許更新制は、その時々で教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目指すものである。

今日の子どもの現状として、基本的な生活習慣の乱れ、基礎的な体力不足、活動意欲の低下、希薄な対人関係などが指摘される共に、いじめ、不登校、引きこもり、学級崩壊などの問題が顕著になっている。こうした問題の原因として、保護者を含む地域の大人のかかわりの少なさ、自然とのふれあいや仲間との交流の少なさといった直接体験の不足が挙げられる。

子どもたちの社会性や豊かな人間性を育むためには、発達段階に応じた体験活動の充実を図る必要がある。そのためには、小・中学校に勤務する教員自らの体験を豊かにするとともに、体験活動に関する基礎的な知識や技能を身に付けることが求められる。そこで、当所で免許状更新講習を実施するにあたっては、「実際に体験する」「指導方法を学ぶ」「学級づくりや仲間づくりへの活用を考える」という3つのポイントについて留意し、活動プログラムを企画・立案している。

当所での実施は3年目となり、教員間での認知度も高まっている。

2. ねらい

地域の自然環境を生かした「生活科」、「理科」、防災や環境をテーマにした「総合的な学習の時間」を指導するための必要な知識・技能を身に付ける。また、自然体験活動の指導技術を身に付け、体験活動の重要性について体感すると共に、学級づくりに役立つ体験学習を活用した指導法について学ぶ。

3. 主催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家

4. 期 日 平成24年8月27日(月)・28日(火)

5. 場 所 国立大洲青少年交流の家 肱川中流域の河原(大洲大橋下) 他

6. 参加人数 39名 (募集人数30名)

7. 講師 家山 博史 氏 (愛媛大学教育学部 教授)
高橋 治郎 氏 (愛媛大学教育学部 教授)
佐野 栄 氏 (愛媛大学教育学部 教授)
国立大洲青少年交流の家 所長 企画指導専門職

8. 日程

8/27 (月)	8:45	9:00	9:15	(休憩)	13:30	15:30	15:45	16:15			
	受								休	試	解
	付	ガイダンス	実習 「体験活動の指導法Ⅰ」 (安全管理・野外炊飯) 3.5h			実習・講義 「体験活動の指導法Ⅱ」 (講義・グルーワークゲーム) 2.0h			憩	験	散

8/28 (火)	8:45	9:00	9:15	12:00	13:00	14:00	14:15	15:45	16:00	17:00	
	受			昼		講義	休	実習・講義	休	試	解
	付	ガイダンス	実習 「河原で観察」 2.5h	食	1.0h	「地学分野」	憩	1.5h 「生物分野」	憩	験	散

9. 活動内容

<8月27日(月)>

【実習】体験活動の指導法Ⅰ 講師 企画指導専門職

体験活動を効果的に実施するためには、プログラム内容が重要であると同時に、事故やけがなく体験を最後までやり通すことも重要である。そこで安全管理を行う上で、最近では一般的になっている「リスクマネジメント」という考え方を、まず初めに説明した。その後、活動が行われる炊飯場周辺を下見し、危険箇所の確認と、活動中に起こりうる事故やけがを付箋に書き出す作業「リスクの発見・把握」を行った。

次に各班で書き出した事例について、確率と危険度で分類し「リスクの評価・分析」を行った。そして、「それらの事故やけがを防ぐためにどのような対策をとればよいか」「発生したらどう対処するか」など、「リスクの対処・処理」を各班で話し合い、画用紙にまとめて発表した。

野外炊飯実習(カレーづくり)では、効率的な火の起こし方、おいしいご飯を炊くための時間配分、片付けの時間を短縮するための知恵等、実習を通して学んだ。その中でも野外炊飯の一例として紹介した、被災地や避難所での炊き出しに活用されている炊飯用ポリ袋への関心が高く、実際にポリ袋を使って炊飯したり、「防災教育の授業で活用したい」と持ち帰ったりする受講者が多数いた。

体験活動の指導法や安全管理について再確認したり、新たな発見をしたりと有意義な時間を過ごすことができた。初対面の者が多い中、手際よく役割分担をし、各班おいしそうなカレーができあがっていた。



【実習・講義】体験活動の指導法Ⅱ 講師 所長 企画指導専門職

午後からは視聴覚室にて、国立大洲青少年交流の家所長が、体験活動の効果と教育的意義についての講義を行った。「学校で自然体験をすすめるために」のテキスト等から抜粋した資料を活用し、青少年の現代的課題である子どもたちの自然体験不足の実態について説明した。「体験活動は、豊かな人間性や自ら学び考える力、生きる力の基盤を育てる」「子どもの頃の体験活動は豊かな人生の基盤になる」等、国立青少年教育振興機構が行った体験活動等の調査結果を提示することで受講者は体験活動の具体的効果や意義について再確認することができた。

講義後は、会場をホールに移し、企画指導専門職によるグループワークゲームを実施した。単なる楽しいレクリエーションの時間とにならないよう、「体験したことによる気づきを学びにつなげていく」という体験学習の循環過程について学んでから、グループワークゲームを実際に体験した。「ハイタッチから握手」「両手を合わせてあいさつ」…と少しずつ身体接触や人数を増やし、お互いの協力や信頼関係を築くゲームを組み込むことで、徐々に緊張もほぐれ笑顔が増えていった。



終盤には、課題を解決する過程での気づきを一般化・概念化し、次の活動につなげるゲームを取り入れ、適宜、指導や言葉掛けのポイントを説明しながら「ふりかえり」を入れることで、その重要性を認識することができた。スタンドアップでうまく立ち上がったときや、フープ知恵の輪が成功したときには歓声があがり、大きな達成感も味わうことができた。

< 実践例 >

拍手ゲーム、ジッピーが言いました、7-11、相性チェック
スタンドアップ、仲間集まり、ネームトス、トラストウォール
キャッチ、ヘリウムフラフープ、フープ知恵の輪等



< 8月28日 (火) >

【実習】河原で観察

講師 愛媛大学教育学部教授 家山 博史 氏
愛媛大学教育学部教授 高橋 治郎 氏
愛媛大学教育学部教授 佐野 栄 氏

免許更新講習2日目は、肱川の中流域にあたる大洲大橋下の河原で2班に分かれて水生生物と岩石の採取や地形の観察を行った。環境影響評価の一般的な生物指標である水生生物の採取法の実習では、生物の採取方法や生態についての説明があった。受講者は、川の中にある石を裏返したり、砂利をかき混ぜて下流側の網で受けたりして、いろいろな種類の水生生物を採取し観察することができた。



岩石の採取では、肱川の河原にある石の中から代表的な8種類(チャート、砂岩、砂泥混在岩、石灰岩、赤色頁岩、変ハンレイ岩、緑色岩、緑色砂岩)の岩石を採取した。なかなか見つからない岩石もあったが熱心に探し回り、すべての岩石を見つけ出した受講者もいた。その後、見つけた石灰石に塩酸をかけ、二酸化炭素の発生を確認した。「2億4千年前に取り込まれた二酸化炭素が発生している」との解説に、受講者は目を輝かせながら実験を行った。

パックテストによる水質検査では、川の水の他、米のとぎ汁や液肥を薄めたものについてpH、COD、PO₄の3項目の検査を行った。各班に分かれたあと、標準色と照らし合わせながら、協力して検査することができた。



【講義】地学分野

講師 愛媛大学教育学部教授 高橋 治郎 氏
愛媛大学教育学部教授 佐野 栄 氏

午後からは自然環境館2階のシアタールームへ会場を移動し、午前中の実習のまとめを行った。地学分野のまとめでは、「河原の石から大地のつくりを探る」と題して、肱川の特長や河原の石の特徴、四国の地質分布などの解説があった。4つのプレートがぶつかり合う中で、海洋プレートのもぐり込みによる海

溝堆積物や海山の付加によって、まったく違う場所に堆積してできた岩石が同じ肱川の河原で見つかることがわかり、大陸の動きや肱川の流域面積の広さを実感することができた。

また、水質調査のまとめでは、各班の検査結果をホワイトボードに書き出し、それぞれの調査項目について考察した。改めて、家庭排水が河川の水質に大きな影響を与えていることが理解できた。



【実習・講義】生物分野

講師 愛媛大学教育学部教授 家山 博史 氏

自然環境館1階エコスタディールームでは、水生生物を指標にした環境影響評価の利点や欠点についての講義の後、午前中に採取してきた水生生物の同定作業を行った。実体顕微鏡を順番にのぞき、資料と見比べながら名前を調べていった。微妙に違う触角の数や尾の形など、よく似た水生生物の姿に苦労しながらも、楽しみながら協力して同定作業を行うことができた。

10. 参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

*満足：85% *やや満足：15% *やや不満：0.0% *不満：0.0%

- リスクマネジメントという、学校現場では常に気をつけておかなければならないことを具体的な事例を考えながら学ぶことができたのが良かった。
- 何度も行っている野外炊飯だが、今日行ったことは指導法が体系化されており、学校現場にいる者にとっては是非今後も生かしたいと思えることが多かった。
- 今回は新たに、ポリ袋を使つてのごはん作りを体験させていただき、たいへん有意義であった。
- 現代の青少年の課題や体験活動の必要性を学ぶことができた。現代の課題は大人になっても影響を受けることにショックを受けた。
- グループワークでは、新しい内容を教えていただいたので、機会を見つけてしようと思った。
- 講師の先生方が、たいへん熱心で楽しく受講することができた。河原の実習では、石灰岩を発見できたときは感動した。

11. 成果と課題

愛媛大学と連携しながら広報活動を計画的に行ったことで、募集人数を大きく超える応募があった。参加体験型の更新講習のニーズが高まり、参加者自身が体験活動の有効性を感じていると考えられる。また、事業後のアンケートでリスクマネジメントの重要性に触れた参加者が多かったことは、学校現場での危機管理に対する意識の高さの表れであり、リスクマネジメントについては、継続していきたい。

課題としては、受講希望者が多いことから、受入人数や実施回数を検討していきたい。また、教科として理科等に特化するだけでなく、他教科にも拡張されるよう考えていきたい。そして、「グループワークのマニュアルがほしい」との意見もあったので、学校現場でも活用できる資料の作成にも工夫していきたい。